



花さき山

タイトル文字: 滝平二郎



育児コンシェルジュ

明野図書館では毎週、
火曜・木曜 10:00~14:30

上記の時間、お母さんやお父さんが図書館でゆっくり本を選べるように、育児コンシェルジュがサポートします！簡単な子育て相談もできますよ♪

ブックスタートクラブ

毎週水曜日は視聴覚室開放 day♪

☆幼児向けおはなし会☆

9月6日、13日、27日 ⇒10:00~
20日 ⇒11:00~

☆9月のおはなし会☆

9月2日(土)と17日(日)
11:00~11:30

明野図書館 児童室でお待ちしています！

やってみよう！

ビブリオバトル☆

ビブリオバトルを知っていますか？知ってる人も知らない人もぜひ一度参加してみてください！

場所：明野図書館 視聴覚室

日時：10月8・15・22日 いずれも日曜日
14:00~15:00

申込：事前申し込みが必要です。

9月17日(日)から受付スタートします☆
ご希望の方は明野図書館 カウンターまで(*^_^*)

音読会



場所：明野図書館 視聴覚室

日時：9月5日(火)
11:00~12:00

気軽に発声練習してみませんか？

大人向けの音読会です。

もちろんお子さんも参加できますよ☆

9月のテーマは、『唱歌~夏~』！



ひと箱図書館

あなたはどんな図書館をつくる？

明野図書館にある本から好きな本を選んで、自分だけのひと箱図書館を作っちゃおう！

工作会:10月1日(日)14:00~17:00

展示期間:10月1日(日)~31日(火)

申込:9月1日(金)から受付スタート。

明野図書館 カウンターまでお越しください。

9月は大人向け映画会

場所：明野図書館 視聴覚室

日時：9月23日(土) 10:00~

内容：「ドラゴン・ウォリアーズ」

(上映時間：113分)

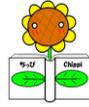
お申込不要です。無料でご覧いただけます。

《9月の特集コーナー》

場所：明野図書館 カウンター前

「特集コーナー」

テーマは「空」 チェックを忘れずに！



忘れ得ぬ一冊の本

竹原素子

私はあと四ヶ月すぎると齢九十になる。想定外の自分の生に呆れてしまうが、なぜか高齢の実感が湧かない。しかし年相応に肉体の衰えは自覚できる。ここらで、老いた自分を試してみようと、久しぶりにペンをとったわけである。

省みればわが人生の半分は読書の世界にあったと思う。本無くして自分は無かった。本は心の糧であると、しみじみ実感している。

昭和二十年夏、長く続いた戦争がパタッと終わった。私は満十八歳。戦中の臨時教員養成所を出て間もなく、新潟県のある村の国民学校の新米教師になった。物心ついた時から、大日本帝国の戦争教育ばかり仕込まれてきた私の眼前に拮がるものは、抛り所を失った飢餓状態の、憂うつなキャンパスである。私は無為が嫌いだ。家の蔵書を漁り、漱石、芥川や志賀を読みまくり、ロシア文学のトルストイには、傾倒していた。読書によって、自分を充たしたかった。

ある日、高等科担任の先輩のS先生が、「これおめさんに貸すよ」と、一冊の厚い本を差し出した。彼はひまな時間にはストーブを囲んで日本の近代文学の小説を語りあう、国語のベテラン教師であった。手渡されたのは「キュリー夫人伝」（白水社刊）。初めて見(まみ)える本であった。

読み始めて、私はすっかり魅了された。夢中で入り込んでしまった。これまでに親しんだ文学書とは異なる次元であって、心は湧き返り、本と一体になって揺すぶられ通した。おのずと私は、自分自身を重ねながら読んでいた。こんな読書は今まで無かった。はじめて私の心は眼を開いた。

それはキュリー夫人が天才で「放射能」を発見した、世紀の偉人という結果に対してだけではない。マーニャスクロドフスカと呼ばれた少女期に、ロシアに支配される敗戦国ポーランド人として、いろんな試練に耐えて成長する姿。支えあう家族たち、恋、学ぶことへの執念。最愛の夫ピエールを失い、晩年も己れを誇示することなく、世界平和を語り、質素で謙虚な姿勢で、静かに生涯を閉じられた。私はその美しい晩年の姿に、深い余韻に浸ったものだ。

この本の著者はエーヴ・キュリー。夫人の次女である。日本で翻訳されて世に出たのは昭和十三年秋である。二度読んだあと私は、ああもっと早くに読みたかったと、悔やんだ。

戦時の高等女学校や家庭の教育は、事ある毎にベカラズ、ベカラズの良妻賢母教育であった。それに不満を持ちつつ終戦を迎え、世の中に投げ出され、彷徨の中で女性として自律的に生きる示唆を与えられたのは「キュリー夫人伝」であった。S先生に返すのさえ惜しまれた。しかしその後、昭和二十四年に改版発行された。さっそく私は手に入れ、またくり返し読んだ。七十年後の今、その愛蔵本を出して眺める。翻訳した当時の三人の気鋭の学者の「あとがき」の文章がふたたび、老いた私の胸を熱くする。感無量である。

(たけはら もとこ／作家：水戸市在住)